

成人愛着スタイルが再確認傾向に及ぼす影響

宇野 千咲香・宮本 正一

(岐阜大学大学院教育学研究科・岐阜大学教育学部)

Key Words : 抑うつ, 成人愛着スタイル, 再確認傾向

<研究の目的>

Coyne (1976b) は、抑うつ者の抑うつ症状を維持・悪化させる要因の1つとして、再確認傾向(Reassurance-seeking)を挙げている。再確認傾向とは「自分は愛されているのか、自分は価値がある存在なのかについて、すでに確認をしたかどうかにかかわらず、他者に対して過度にしつこく確認を求めてしまう比較的安定した傾向」である。

抑うつ者は、重要他者からの再保証を必要とし、フィードバックを要求する(再確認)が、一旦受け取ると、その再保証は再び疑われる。そして、また再確認を行う。そのため、重要他者は欲求不満になり、イライラし、抑うつ者を拒否するようになる。重要他者からの拒否は、抑うつ者をますます抑うつ状態へと導く。

再確認に影響を及ぼすものとして、本研究では「愛着」を想定した。

愛着とは、Bowlby (1973) によれば「特定個体との近接を求め、またそれを維持しようとする傾向、あるいはその結果確立される情緒的絆そのもの」である。乳幼児期における愛着の重要性に加えて、Bowlby は、愛着を、相対的に無力で依存的な乳幼児期のみならず、個人が自律性を獲得した後でも、形を変え、生涯を通じて存続するものだと仮定している。

Brennan ら(1998) は、「親密な対人関係体験尺度」(Experiences in Close Relationships inventory)を作成し、成人愛着スタイルを「親密性の回避」因子と「見捨てられ不安」因子によって4分類化した。

本研究では、被験者に重要他者を各自想定させ、またそのコミュニケーション手段を尋ねた上で、以下の仮説を検証することを目的とした。

仮説1 重要他者に対して、「見捨てられ不安」が高く、「親密性の回避」が低い成人愛着スタイルをもつ被験者群は、重要他者に対して親密性を強く求めつつ、見捨てられるのではないかと不安を低減させようと、再確認をより多く行うであろう。

仮説2 「友人」や「恋人」は「家族」よりも変動性があり、不安を喚起しやすいために、想定する重要他者が「友人」や「恋人」の場合は「家族」のときに比べ、不安を低減させようとすることから再確認をより多く行うであろう。

尚、本研究では「成人愛着スタイル」と「再確認傾向」の関係に中心を据えて研究を進めたが、「再確認傾向」は「抑うつ」の原因と考えられていることから、「抑うつ」との関連についても加えて検討を行っている。

<方法>

岐阜大学全学共通教育受講者72名と、教育学部3年次対象講義受講者265名に対し、授業終了約15分前に質問紙を一斉配布し、回答を求めた。

質問紙は、フェイスシート(性別、重要他者が誰であるのか、重要他者との主なコミュニケーション手段等)と抑うつ自己評定尺度<

20項目>、成人愛着スタイル尺度(ECR)日本語版<26項目>、確認を求める傾向尺度(勝谷,2000)の3つの尺度から構成された。

<結果と考察>

再確認傾向に対して、「見捨てられ不安」の主効果は認められるが、「親密性の回避」の主効果とそれらの交互作用は認められなかった。ここから、再確認を引き起こすのは成人愛着スタイルのうち「親密性の回避」ではなく、「見捨てられ不安」であるということが出来る。

これらから、「見捨てられ不安」が高いものはそれを低減させようと重要他者に対して再確認を求めようとするという仮説が支持されたといえる。

仮説1では、「親密性の回避」が高く「見捨てられ不安」が高い群が最も再確認傾向が高いのではないかとされていたが、本研究の結果では、親密性の回避得点に関わらず、見捨てられ不安の高い群の再確認傾向が高かった。

成人愛着スタイル得点において、「友人(異性)」や「友人(同性)」を選択した場合、「恋人」や「その他」を選択した場合に比べて、有意に得点が高かった。

一方、再確認傾向得点において、「友人(異性)」や「恋人」を選択した場合、「友人(同性)」や「その他」を選択した場合に比べて、有意に得点が高かった。

仮説2の通り、家族などを含んだ「その他」に関しては、成人愛着スタイル得点、再確認傾向ともに得点が低い。つまり、家族に対しては、親密性を求めるが、見捨てられ不安が少なく、再確認を求めるとも少ないということが出来る。

血縁関係などは簡単に変動することが少なく、他の人間関係に比べ、安定した関係であるということができ、そこから2者の関係を確かめる必要性も少ない。

一方、友人や恋人はつねに変動する可能性を秘めており、そのために見捨てられ不安が高まりやすいため再確認が生じやすい。

成人愛着スタイル得点について、その他や恋人の得点が、友人(異性、同性)に比べて低いのは、恋人や家族というのは2者間である種の契約がなされており、2者の1対1関係が安定しているが、友人間では、明確な契約がなされず、その関係の不安定さから見捨てられ不安が生じやすいためと考えられる。

また、再確認傾向得点について、恋人や友人(異性)の得点が、友人(同性)やその他に比べて高いのは、ここでいう友人(異性)に対して被験者は恋人に対する好意と似たものを持っており、1対1関係を求めようとする気持ちが生じやすいためと考えられる。つまり、1対1関係をより確かなものにしていこうとする願望が再確認となつてあらわれるのである。

(Uno, Chisaka & Miyamoto, Masakazu)